

科学，ユートピア及び「批判」

——Fr. エンゲルスを中心にして——

林 喜代三

はじめに

G. W. F. ヘーゲルにおいては、思弁理性の認識体系として、形而上学が成立した。その形而上学はイデアリスムス（観念論＝理想主義）であると同時に、その必然的契機として弁証法をとった。これに対し、マルクス主義においては、この形而上学観や弁証法概念が全く反対になる。その思想は、何よりも先ず、ヘーゲルのイデアリスムスを逆転して、マテリアリスムスを主張した。これは常識とされている。マルクス主義が逆転せしめたのは、これのみではなく、さらに形而上学と弁証法との関係をも逆転した。つまり、形而上学と弁証法との関係が、敵対関係におかれることとなった。

だが、マルクス主義において、形而上学（及び弁証法）という用語法の起源・歴史についての厳密な検討・反省は行なわれたであろうか。一般に、これが実行された著作としてあげられるのは、Fr. エンゲルスの『ユートピアから科学への社会主義の発展』——Utopieを「空想」とはせず「ユートピア」のままにした理由は後述を参照——である。この書は、言うまでもなく、『オイケン・デューリング氏の科学の変革』——通称『反デューリング論』——を、エンゲルス自身が啓蒙・普及用に、簡潔に要約したものとされている。ここでは、『反デューリング論』は、参照するにとどめ、『ユートピアから科学へ』を検討することにする。これがマルクス主義文献の中で最高の普及をし、最も教科書的な役割を果していることから、この検討の意義は充分あろう。

ただし、本稿では、エンゲルスの資本主義（及び社会主義）論たる第三章は

さしあたり省略し、彼の形而上学（及び弁証法）論とユートピア（及び科学）論とを、即ち第二章と第一章とを取りあげる。これらの章は、実は『反デューリング論』の序説1「総論」とほとんど変らない故に、どちらにしても相違はあまりない。先ず形而上学（及び弁証法）論から始めよう。

1.

科学なき形而上学は空虚であり、
形而上学なき科学は盲目である。

Fr. エンゲルスは、形而上学を弁証法に対立させ、後者こそが真の認識方法であり、前者は誤った認識方法であるとする。——このような扱え方は、おそらく、Fr. エンゲルスにおいて始まるものと思われる。

彼は言う、「形而上学者にとっては、諸事物及びその思考模写物たる諸概念は、個別化され・一つずつ他との関連なしに観察すべき、固定し・静止した・いつも変らぬ所与の研究対象である。」⁽¹⁾云々。

これに対し、弁証法は「諸事物及びその概念的模写物は、本質的に、それらの連関・連鎖・運動・成立及び消滅において把える」⁽²⁾云々とされている。つまり、弁証法とは、存在を全体として、動的な発展の体系とみる方法と解されている。

かく、形而上学と弁証法とが対立的に解されているのだが、その場合のエンゲルスの哲学史的反省をみても、彼の哲学史の概括ないし諸哲学の位置づけは、かの G. W. F. ヘーゲルの『哲学史』以上に、図式化されている。

例えば、彼は、古代ギリシアの哲学を特徴づけて言う、「古代ギリシアの哲学者達はすべて生れながらの・自然的弁証法家であり、なかでも極めて教養の広がったアリストテレスもまた、弁証法的思惟の最も本質的な形式をすでに研究していた。」⁽³⁾だが、ギリシア哲学者がすべて天成の弁証法家であったとは、およそ哲学史の常識に反する。常識に反すること自体は必ずしもその誤謬を証明するものではないが、しかし、常識に反することを主張するには、その証拠を挙げ、常識を論駁しなければならない。事實はむしろ、古代哲学者の多くは生れながらの形而上学者であった。まして、アリストテレスについて、弁証

法の研究を一面的に強調するのみで、彼の形而上学の体系については一言も触れないのは、全く正当な扱いとは言えない。そもそも、形而上学なる学の名称と内容とは、アリストテレス哲学をもって確立してきた。そこでは弁証法と形而上学の対立ではなく、関連こそ解明されるべきである。——近代哲学において弁証法の確立とそれによる形而上学の再興を試行したヘーゲルの、アリストテレス評価が参照されるべきである。

また例えば、近代哲学についても、エンゲルスは断定的に概括して言う、「比較的に新しい哲学は、これに対し、弁証法において輝かしい代表者をもった（例、デカルト及びスピノザ）にも拘らず、殊にイギリスの影響によってしだい（4）にいわゆる形而上学的思惟様式へとおちこんでいった」云々。ここでは、デカルトやスピノザが近代哲学における弁証法の輝かしい代表者だとされる一方、イギリスの経験哲学は形而上学的思惟様式をおしすすめたとされている。

ただし、「自然をその個々の部分に分解すること、種々の自然諸経過及び自然諸対象を一定の部類に分けること、諸有機体の内部をその多様な解剖学的諸姿勢に従って研究することが、自然の認識において……もたらされた巨大な進歩の根本条件であった（5）」ことは、彼も評価している。このことは、科学の方法には必然である。およそ科学は局部認識に向う——それが方法論的に自覚されているか否かの差はあれ。

ところが、続いて「ベーコンやロックによって実際に引き起されたように、この観方が自然科学から哲学へ移入されたので、それは前世紀に特有な偏狭性、形而上学的思惟様式をつくりだした（6）」とされる。ここで彼が言わんとすることが、科学の方法をそのまま「全体認識」の学たる形而上学に適用せんとするは誤謬であるということであれば正解である。しかし、形而上学自体を否定せんとするのであれば誤解である。科学次元を超えた形而上学の可能性は改めて吟味されねばならない。

なお、エンゲルスのように固定的・断片的で、変化・発展を捉えられない方法を攻撃するに「形而上学的」なる言葉をもってするのはすでにヘーゲルにも見られる。——ヘーゲルとエンゲルスの類似性の一例。

2.

次いで、弁証法の諸契機が提示されている。第一に「肯定的と否定的とのような、対立の両極は、相互に不可分でもあり対立してもいるということ、またそれ〔＝対立の両極〕は一切の対立性にも拘らず相互に滲透しあうということ⁽⁷⁾」云々。第二は、既述した通り。最後に、「自然は弁証法にとって実地証明⁽⁷⁾になる」こと。ここでも自然弁証法が主張されているが、Fr. エンゲルスの『自然弁証法』でのその例証とされているのは、G. W. F. ヘーゲルのそれと全く同一の事柄が多い。例、水から水蒸気への転化、及びその逆。観念論から唯物論へ転倒しても同一例がやはり検証として役立っている。そして、「自然は弁証法的に動くのであって形而上学的ではない⁽⁸⁾」とされている。——両者の類似性の別例。

両者とも弁証法で万事を説明可能とする傾向が強い。例えば、K. ポパー『弁証法とは何か』のように、弁証法が多産ではあっても、「何でも説明する」構えをもたせると、逆に強化された——いかなる非難も気にする要のない——ドグマティズムになるとの攻撃に対し、反論できるか。問題は、ある意味でポパー自身も認めているように、弁証法の使い所にある。

また、E. カントについては、『批判』哲学以前の形而上学説たるいわゆるカント＝ラプラスの星雲説を弁証法の最初の検証だと、Fr. エンゲルスは評価しながら、『批判』哲学の意義、それと形而上学・弁証法との関連には全く触れていない。そして、カントによって創始された「新しいドイツ哲学はヘーゲル体系においてその完結を見出した⁽⁹⁾」とされている。ドイツのイデアリスムス哲学の完成者たるヘーゲルがエンゲルスによれば、形而上学に対立する弁証法の完成者であったことになる？ ヘーゲルこそ、カントの「批判」哲学の意図を延長させて、形而上学を再建したにも拘らず。

むしろ、エンゲルスも、ヘーゲルが欠陥を持たなかったとは言わない。ヘーゲルは正当にも弁証法を樹立したが、それは逆立ちしていたとされる。エンゲルスのあげているヘーゲルの制約とは、第一に「彼自身の知識の範囲が必然的に制限されていた⁽¹⁰⁾」こと、第二に「彼の時代の知識と見解もその範囲と深度に

において制限されていた⁽¹⁰⁾」こと、最後に、「ヘーゲルがイデアリストであった⁽¹⁰⁾」
 ことである。このうち、第一と第二の制約については、それが正しい限りでは、
 殊更に論ずるまでもないことである。第三の制約については、エンゲルス
 自身、言い換えて、「彼にとって頭の中の諸思想は現実の諸事物や諸経過の多
 かれ少なかれ抽象化された模写物だとみなされず、逆に諸事物とその発展はた
 だ世界以前にすでにどこかに存在する『イデー』の現実に現われた模写物だと
 みなされた⁽¹¹⁾」云々とする。ヘーゲル体系は「要するに、転倒していたのだ⁽¹¹⁾」
 と。関連を逆にすればいいのであろう。何と簡単なことか！——相互に逆立ち
 してみえるとき、一方の正立を保証するものは何かが攻究されねばならない。
 独断を攻撃するに独断をもってしてはならない。そこでは一見「批判」が存在
 するようで実は真の「批判」精神が欠如している。

確かに、ヘーゲルはカントの「批判」の意義を認めつつも、カントに欠けた
 ——と思われた——形而上学を性急に求めた。ただし、カントの「批判」を経
 た後での形而上学の構築においては、全体考察はイデーをもってしか果され得
 ないとの自覚のもとで、イデアリスムスが主張されたととるべきである。この
 理解がなく、諸事物がそれに先立つイデーによって模写されたものだとヘーゲ
 ルが真に考えていたとすれば、いかにもバカげて無知な独断的哲学者が存在し
 たことになる。

このようにヘーゲルを単純化した上で、ただその彼を半転させた、思惟・思
 想こそが諸事物やその発展の模写であるとの模写説ないし反映論はこれまたい
 かにも単純で独断的なものとなろう。全体考察——まさに形而上学の次元——
 において、イデアリスムスを捨ててしまうならば、何によってその「学」の存
 立が保証されるのか。残るは、「全体考察」の学の不用論でしかない。事実、
 エンゲルスは言う、「各々の個別科学が、諸事物及び諸事物についての知識の
 全体連関においてその位置を明らかにせんとする要求がとおるや否や、全体連関
 についての特殊な学問はみなよけいなものとなる⁽¹²⁾」と。そして、残るは、哲学
 の中での形式論理学及び弁証法と、実証科学のみであるということになる。

だが、個別諸科学にそれぞれの相応した位置を保証するものは何であろうか

——個別諸科学自身ではありえない。むしろ局部認識としての科学——エンゲルスもいのようにそれは実証科学となる——が発展・分化するにつれ、それとは別の次元で全体連関の考察をすべき「学」の必然性が明らかとなる。その全体考察の学こそ形而上学とよばれてきた学の任務である。実証の局部性を越えて、形而上学を成立させるためにこそ弁証法が独自に必要とされる。ヘーゲルの志向したものは——その結果の如何はともあれ——これであった。そして、科学と形而上学との有効領域を峻別し、相互の越権を防止していたものこそ、カントの「批判」であった。彼は形而上学の方法を科学次元へと広げる独断的な越権と科学の方法をすべてとし形而上学の成立についての独断的棄権とを、ともに防止せんとした。「形而上学的な観方は、対象の性質によってはかなり広い領域で正当であり且つ必然でさえあるが、しかし……その限界の彼方では一面的で・偏狭で・抽象的になり、解きえない矛盾におちいって迷うことになる⁽¹³⁾」云々とエンゲルスが言っていることは、カント「批判」の意義を正解した上での言葉ととれば、正しく響く。

カント「批判」哲学は、決して不可知論なる語をもって葬り去ることはできない。⁽¹⁴⁾

エンゲルスにおけるこのような混乱の原因は、好意的に解釈すれば、『ユートピアから科学へ』が論争の書であったが故と理解しうる。彼にとって重点は「弁証法」弁護にあり、その反対概念として——選択は不適當であったのだが——「形而上学」が採用されたのであろう。ここにヘーゲルを中心として諸哲学者の評価の一面的強調の多い理由が理解される。そしてデューリングのような似非形而上学者を攻撃せんとするあまり、「形而上学」そのものを否定してしまつたと予想される。デューリング的形而上学体系への攻撃の意図は、『反デューリング論』の書名にも明らかであり、またその序説 2.「デューリング氏の約束するもの」に表明されている。

ところが、現在、その敵はすでに不在である。にも拘らず形而上学の攻撃の面が残ってしまった。そこに誤解と不幸が始まった。その点で、誤解の責任は、エンゲルス自身によりもむしろ後継及び現代のマルクス主義者に存する。

3.

形而上学にとってイデーが不可欠であることとともに、「批判」とユートピアの関連の問題があらわれてくる。エンゲルスは、社会主義についてユートピアが科学へと発展的に解消すると言っている。ここで、本書の第一章の検討に移る。

「ユートピア」なる語は、かつてはロマンティックな響きをもつ憧憬の対象であった。現在でもそれが全く残っていないわけではない。しかし、むしろ今では「空想」ないし「夢想」と同義とされ、現実性を欠如したものの意で使われる。「ユートピアン」といわれる時、それは「夢想家」として蔑視的な響きをもつ。殊に、「社会主義者」ないし「マルクス主義者」——少なくともその一部——にとっては、ユートピアとは否定さるべきものである。その源泉が、エンゲルスの『ユートピアから科学へ』にある。しかも、日本では Utopie (utopisch) が空想(空想的)と訳されることによって、その蔑視性が一層助長された。エンゲルスの意図を理解するためには、「空想」とは訳さずに「ユートピア」のままにしておくのが妥当である。

もともと、ユートピア——その名の案出者たる Th. モアや T. カンペネラ等を代表として——は現実の裏返しとしての社会の青写真が構築されたものであり、それを武器として現実が「批判」されてきた。ユートピアと「批判」とが歴史的にも並行してきた面もあり、近代的「批判」の誕生はユートピア論の誕生と同時であったといえる。それはカントの「批判」哲学にまで発展する。また、批判的精神をもった思想家にはみなユートピアの要素が色濃くみられる。例えばカント以前には、すでにプラトンがおり、カントと同時代には A. スミスがおり、そしてカント以後には K. マルクスがいる。だが他面では、確かにユートピアには、それが無自覚に使用されると、「空想」に墮する傾向もある。その意味でのユートピアンへの攻撃は正当である。そうすると問題は、ユートピアの構想が方法的に確立されているか否かにあることとなる。

歴史理論においてみれば、単なる既成社会の裏返しとしてのユートピアでなく、さらに進めて歴史の傾向から歴史の究極に、しかも歴史を超えた所に確定

した社会＝ユートピアを構想し、それを測度基準にして、一切の社会＝歴史を「批判」し、その意義と限界とを明らかにしていく。この「社会」像を、「方法的ユートピア」⁽¹⁵⁾と呼んでおいた。これは、当然「全体」考察の次元に属し、その構想と活用とは弁証法でしかありえない。双方が相互に否定しあって、相互に深化させていく。これは、すでにカントに、そしてマルクスにもみられた。カントの「批判」は「ユートピア論」の確立でもある。彼は科学と形而上学のそれぞれの有効領域を確定し、後者の再建のための方法としてイデーの活用を提唱した。これを不可知論として片づけんとするは、カントの方法的自覚への理解の欠如を示す。また、マルクスにおいては、「批判」の方法が深化されている。——「自由人の自由共同体」「自由の王国」の構想とそれによる人類史、特に資本制社会の「批判」という具体的適用の中で。

4.

ところで、Fr. エンゲルスは、サン＝シモン、フーリエ及びオーエンの三大ユートピアン社会主義者——これを「空想的社会主義者」とはしない——について、言う、「資本制生産の未成熟な位置と未成熟な階級地位に、未成熟な理論が照応した」⁽¹⁶⁾のだ、と。ユートピア像の構築方法が深化・確定されなかったことは、彼らの時代的制約の故に、「シカタガナカッタ」のではなく、まさに彼らの時代には適切に照応していたのだ。だからこそ、エンゲルスの時代からみれば、それは不充分性を免れなかったのだ。しかし、理性によって一度び状況から独立し、再び現実へ向う志向において、彼らは適切な方向に向っていたことになる。また彼らは、殊にオーエンの場合——エンゲルスも「社会秩序の新しい完全な体系を見出すこと及びこれを宣伝によって、可能ならば模範実験の例によって、社会に外側からあてはめることが問題であった」⁽¹⁶⁾と指摘するように——ユートピアによる「批判」に、さらにその実例を形成することを実践した。現実を裏返して構想した「ユートピア」像によって既成の現実を批判することから、さらにその具体的な実験を試行することにより、ヨリ具体的に既成の現実を批判せんとする。この立場でのユートピアの現代への継承も多く試行されている。

かくてユートピアには、構想としてのと運動としてのとが分かれる。いずれも「批判」との関わりが深い。そして構想としてのユートピアが「空想」への危険を孕みながらも空想へ墮することのないためには、方法的に確定されたユートピアとならねばならない。歴史理論でのその「方法的ユートピア」は、その構築と適用との相互滲透において、弁証法的になる。出来あがった理論が、弁証法的図式にあてはまるのもそのためであって、弁証法はあくまでその動態の中にこそ働らく。K. マルクスの歴史理論は、「批判」の方法の具体的適用である。G. W. F. ヘーゲルとマルクスの対決の中から再び E. カントが垣間見られる。

およそ「学」には、局部に自覚的に——無自覚な場合もあるが、方法的に反省されればやはり——枠をはめて認識をめざす科学、実証科学と、なおもそれを超えて全体的認識を目指す形而上学とが成立する。それぞれは各々に固有な方法が求められる。そこで全体考察には、その理論のユートピア性の方法的自覚が伴われねばならない。カントはその両面の限界確定と領域内での有効性の承認とを果たした。科学と形而上学との、悟性と理性との、相互的な越権と棄権とを防止せんとした。そこで例えば、A. コントが実証科学を主張し、経験から遊離した単なる思弁的な体系としての形而上学を排斥したのは、カントが放埒な形而上学的思弁を抑止せんとしたのと軌を一にする。局部認識たらざるをえない実証科学が近代の発生・発展と並行してきたのは偶然ではない。「創造的破壊」(J. A. シュンペーター)の過程にある近代資本主義社会でこそ、「他ノ条件ニシテ等シキ限り」の前提のもとでの認識を目指す科学の方法が要求されてこざるをえないから。⁽¹⁷⁾

エンゲルスがユートピアが科学へと発展・解消していくとすることは正当でない。一方、科学が発展すると同時に他方でユートピアも発展し、ヨリ深化してユートピアが再生する。それ故、エンゲルスをひっくり返して、「科学からユートピアへ」(H. マルクーゼ等々)を主張することも正当でない。現代での標語はむしろ、「科学もユートピアも!」だ——「批判」に基礎づけられた上で。⁽¹⁸⁾

再び『ユートピアから科学へ』が論争の書であったことが想起されるべきである。エンゲルス当時なお根強く支配的であった（時代不適合性を忘れた）ユートピアンを攻撃するあまり、ユートピアそのものを否定するかの如くになってしまったのであろう。にも拘らず現代ではユートピア論攻撃のみが強調されて残った。ここでも責任はエンゲルス自身よりもこの書を解説ないし黙認している現代のマルクス主義者にあることになる。

科学なきユートピアは空虚であり、
ユートピアなき科学は盲目である。

あとがき

Fr. エンゲルスの所説を検討してきたが、その一面性を指摘するあまり、その評価に逆の一面性が生じたかも知れないが、それは筆者の本意ではない。彼が弁証法の意義を強調し、ユートピアを方法的に一歩進めたことを初めとして、諸思想について通説を破る評価のあることも看過するべきでない。

なお、以上の論及がマルクスの場合にはどうであるかが改めて検討されねばならない⁽¹⁹⁾。例えば、初期の著作だが、『神聖家族』の哲学概説的な部分などが注意をひく。更には、ユートピア論と「理想型」(M. ヴェーバー)との関係なども検討する価値があろう。

- (1) S. 71 注記の引用頁数は総て Kleine Bücherei des Marxismus-Lenismus の Friedrich Engels: Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft 1966 から。
- (2) S. 72 (3), (4) S. 69
- (5) S. 70 (6) S. 71
- (7) S. 72 第二について注2を参照。又『反デューリング論』での弁証法の3法則についても参照するべきであろう。
- (8) S. 72-3 (9) S. 73
- (10), (11) S. 74 (12) S. 75
- (13) S. 70
- (14) S. 30 etc.「英語版への序文」参照。
- (15) 例えば、拙稿「政治経済学批判と労働価値論」『一橋論叢』第70巻第1号参照。

一 橋 研 究 第 28 号

(16) S. 59

(17) 近代社会と前近代社会との対比について，拙稿「『既成体制』概念の再考」『一橋研究』第25号参照。

(18) S. 68

(19) 試稿として，拙稿「マルクスとエンゲルス——政治経済学批判——」『経済評論』1973. 4. 参照。

(筆者の住所；武蔵村山市中藤1460 村山アパート92-403)